自主性のある豊かな人間関係の集団作り　～防災教育を通して～

座間市立西中学校　小黒竜太

1　はじめに

特別活動の目標は「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、社会や集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方について自覚を深め、自己を生かす能力を養う」ことである。この目標にある「集団」の中心をなすのは、学校の中で一番長い時間を過ごす、「学級集団」であろう。その学級集団で展開される「学級活動」は、よりよい集団づくりをしようとする態度を育てる中で、一人ひとりの「生きる力」をはぐくんでいくように展開されなければならない。

これらを踏まえ、本校の生徒の様子について振り返る。

一人ひとりで考えると、素直で他者に対し優しさを持った子が多いと言える。一方で、優しさや思いやりが、学級を中心とした集団の中ではうまく発揮できないという現状もある。「周りの子がどう思うか」を強く意識しているため、思っていることを言語化したり、行動にうつしたりすることに躊躇する場面が多く見られる。特に、「率先して動く」ということに苦手意識を持っている子が多いと感じる。

そして、これらの課題は私が昨年度に担任をした２年３組でも顕著に表れていた。豊かな人間関係が築かれて、仲間のために行動するような学級集団にするべく、本研究に取り組んだ。

2　研究主題設定の理由

前述したねらいを念頭に置き、４月から学級活動の中でさまざまな取り組みを行った。それらが生徒の人間関係の広がりに寄与したり、自分で考えて行動することの大切さを考

えるきっかけになったりすることもあった。しかし、効果が頭打ちだった実情もあった。

そんな中、６月に行われた避難訓練での生徒の姿が印象に残った。学級に松葉杖の生徒がいたのだが、避難時に校舎の４階から降りて校庭に移動する彼を助けて、支える級友の姿があった。このことは特に指示があった訳でなく、「自主的に」行っていたものだった。防災教育を、指導者側がもっと意図して、生徒が豊かな人間関係を築き、自主的に行動する態度を養う一助とする活動にできないか。これが研究主題設定のきっかけである。

「防災教育」について、学校防災参考資料[1)]では、中学校段階における防災教育の目標が「日常の備えや的確な判断のもと主体的に行動するとともに、地域の防災活動や災害時の助け合いの大切さを理解し、すすんで活動できる生徒」とある。つまり、防災教育にはそもそも防災に関する知識について教えるだけでなく、助け合い、自ら行動できる生徒を育てることをねらいとする側面がある。

しかし、実際の学校の防災教育においては、災害についての知識を教えたり、身を守るための行動実践をしたりという段階にとどまっていることが多いように思う。日頃の学級活動に加えて、防災教育がさらに生徒にとって有益な活動になるよう、研究主題を「自主性のある豊かな人間関係の集団作り」、サブテーマを「防災教育を通して」とした。

４　実践内容

①教室づくり

【ねらい】・学級への帰属意識を持たせる。
・共同作業により、学級の人間関係の広がりの一助とする。

【実践】教室に貼る掲示物を、学活の時間に全員で作り、全員で貼っていった。

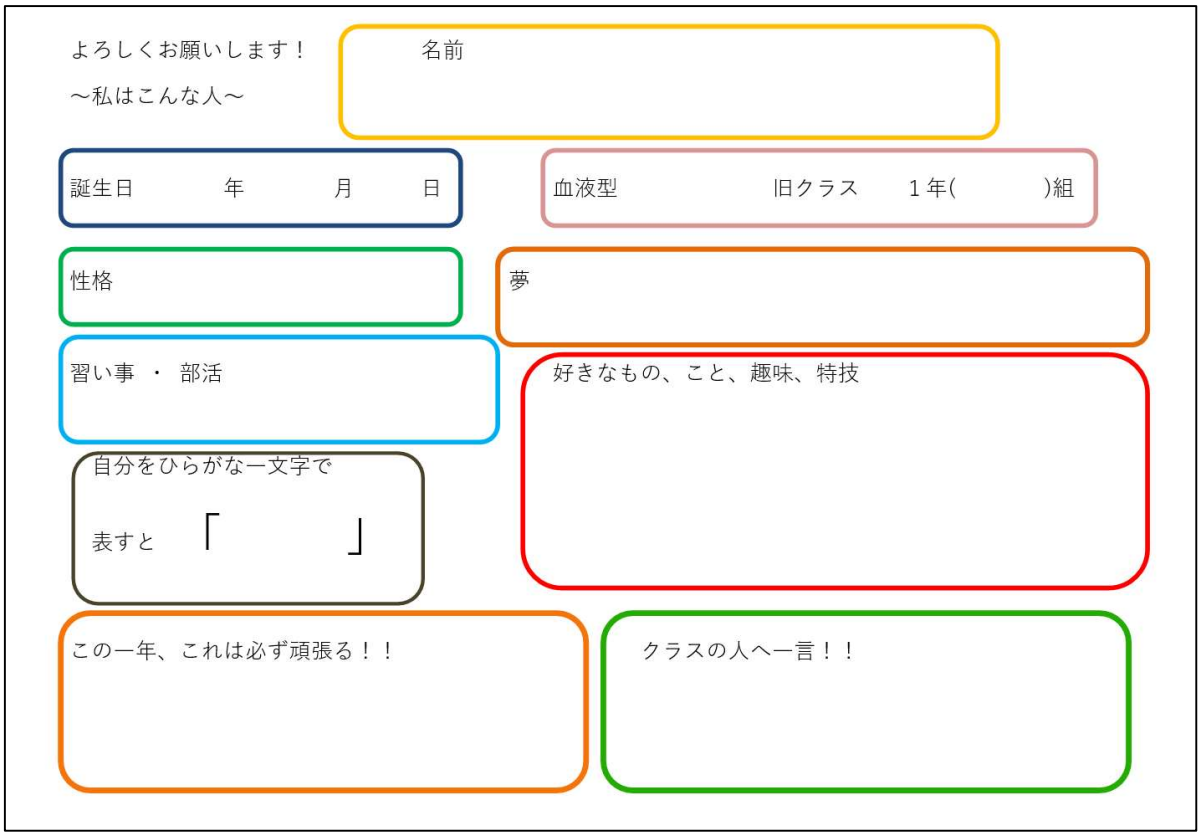
（1）自己紹介カード(※)…教室の後方ロッカーの上に「デスクマット」を敷き、その中に挟んでいった。

（2）個人の目標…… Ｂ４の紙に「１年間の目標」を書き、ラミネート加工して個人ロッカーの奥に貼った。

（3）班員の役割…… 本校は班の中で「一人一役」がある。メンバー表を教室後方の真ん中に掲示した。

(4)バースデーカレンダー…… 教室後方に掲示。

※　自己紹介カード



※この「自己紹介カード」を使って、実際の自己紹介も行った。全体で円になり、
一人ずつ自分の名前に加えて、「カードに書いたことを一つだけアピール」した。
その後、教員のお題に沿って「自己紹介なんでもバスケット」を行った。

②学級目標決め

【ねらい】・クラスへの帰属意識を持たせる。
・豊かな人間関係づくりへの土台を築く。

【実践】全員で目標について考え、作成していった。

(1)「クラスで使いたい前向きな言葉」……あいうえお作文のように、班ごとに前向き言葉を記入していった。

(2)学級目標…… あいうえお作文の「め」は「めんそーれ」が書かれた。「歓迎」を意味する沖縄の方言である。これを受けて、他者への受容について話をする機会を度々設けることができた。
学級目標の掲示物も全員で作った。パズルのようにバラバラになっている紙に一人ひとりが色を塗り、それを貼っていくと学級目標の題字になるという仕掛けを用いた。

③朝学活・帰り学活での取り組み

【ねらい】・自己肯定感を持たせる
・クラスの仲間のよいところについて考え、お互い同士認め合える関係を築く。

【実践】生徒の長所を認め、価値づけ、それに向かって行動できるような取り組みを行った。

(1)学級通信…… 学級通信のタイトルは学級目標の「幸せめんそーれ」とした。帰属意識を持たせるため、題字は一人ひとりが手書きしたものを、毎号載せていった。生徒の良い行動を、名前付きで載せることを心掛け、載せた名前には名簿でチェックをして、偏りがないようにした。
基本的には朝学活の時間に配り、読み上げた。この取り組みは１学期は毎日、２、３学期は一週間に１～２のペースで行った。

(2)一言ノート…… 毎日、生徒と交換日記のようなものを行った。日付とともに思ったこと、絵、図でもなんでも自由に書かせた。帰り学活に集めて、コメントを書いたものを朝学活に返却した。

(3)帰り学活…… 「今日のありがとう」を毎日各班が発表していった。クラスの仲間に対して感謝したいことや、良いところをその場で班長が言うようにした。

5　防災教育の実践

(1)題材名「災害時の行動について考える」

(2)題材の目標
・災害に対しての知識を持ち、適切な行動をとれるようにする
・防災を考えることを通して、自分たちで協力する大切さに気づく。
・自分たちが集団の一員であることを自覚し、集団をより良くしようとする態度を養う。

指導計画(全３時間)

時間	学習活動	評価規準 (評価方法)
1	○災害に関する知識を確認しよう ・「災害」について知っていることを共有する ・自分たちが生まれてから今までにどんな災害が起きたか理解する	【関心・意欲・態度】 ・災害について知っていることについて話し合い、防災についての意識を高めようとしている (話し合い活動、ワークシート)
2	○学校で災害に遭ったらどうするか考えよう ・座間市で予想される災害について理解する ・教室で地震が起きた時に、予想される被害を考える ・地震が起きた時の自分について予想する	【知識・理解】 ・自分たちの住む町で起こりうる災害について理解し、身近なこととしてとらえようとしている。 (話し合い活動、ワークシート)
3 (本時)	○避難所での生活について考えよう ・避難所の中でも、いろんな条件を持った人がいることを理解する。その中から一人選び、どんな状況が起こりそうかその立場になって考える。また、クラスのメンバーで避難所生活をするとしたら、どんなことが予想されて、自分に何ができるか考える。	【思考・判断・実践】 ・避難所について理解するとともに、それを自分たちに置き換えて考え、集団の中で自分ができることについて文章としてまとめようとしている。 (話し合い活動、ワークシート)

ポイント
・地域→学校→教室について考えることにより、だんだん「自分ごと」として考えられるようにした。

・普段とは違った視点で「学級」について考えられるようにした。

第一次「地震について」

・目標　防災に関して、地震を中心とした知識を身に付ける
　　防災を身近なものとしてとらえ、自分事として考えられるようにする

・第一次を行って
　生徒は小学１年生の時に東日本大震災を経験している。そのこともあってか、地震に関して関心は高い。そのことが授業の様子にも表れていた。マッピングで地震から連想する事柄を挙手で発表する場面では、多くの生徒が手を挙げ、発言をしようとしていた。
　また、ＶＴＲを視聴しながら地震に関する事柄をクイズ形式で答えていったが、こちらも真剣に取り組むことができた。「今後防災についての授業を３回に渡って行っていく」という旨のことを授業で述べたが、その意識づけはできたように思えた。

第二次「学校で地震が起きたら」

・目標　防災を自分事として考え、学校生活と結びつけてとらえる視点を持つ。
　　学校の中で地震が起きたときに、どのように行動すればよいか考える。

・　第二次を行って
　前回と同様に、導入の場面では多くの挙手発言が見られた。教室を眺めてあれこれと考える姿が見られた。だんだんと防災と学校、学級を結び付けて考えられるようになってきたことを見とることができた。
　今回の授業のワークシートの最後に生徒が書いた「地震が起きた後、どのように行動するか」においては、前述した「学校生活との結び付け」をねらいとしており、その視点で考えれば一定の成果があったように思う。しかし、書かれた内容を見ると、抽象的なものが多く、また非現実的な答えが見られ、「防災の知識」という観点で考えると不十分な面があった。

第三次「災害時の行動について考える」

・目標　防災を考えることを通して、自分たちで協力する大切さに気づく。
　　自分たちが集団の一員であることを自覚し、集団をより良くしようとする態度を養う。

・第三次を行って
　それぞれの立場になって考えることに苦戦している生徒も見受けられたが、そのような人も班で話し合わせることによって、少しずつ筆が進むようになった。ダイレクトに自分たちの立場で考えさせたときに、躊躇や照れによる弊害が起こらないよう、最初は自分達中学生とは違う立場の人になる設定で思考を促した。客観的な視点になることは、思考の活性化に一定の成果を挙げられたと思う。その後、研究テーマに関連する「このクラスで避難生活を送るとしたら」という視点で考える活動を行った。

まず、「座間市で予測される地震のうち、『都心南部直下型地震』が起きた場合、避難者は11,000人」と言われている座間市のホームページ[2]のデータに触れた前次までの授業の話を思い出させた。そして、避難生活をするとしたら、このクラスの人たちとも顔を合わせることもあるだろうと言う話によって、意識作りをした。生徒の考えには以下のようなものがあった。

ワークシート抜粋

このクラスで避難所生活をするとしたら！？

自分がいる２列の人について、「誰が、何をできるか」を書きましょう！！

(　　)さん…(　　)ができる！

(　A　)さん…(　届いた物資を運ぶ、避難所を作ること　)ができる！

※Ａさん…スポーツ好きで、活発な子。集配の仕事をよく手伝っている。

(　B　)さん…(　受付、お年寄りの案内　)ができる！

※Ｂさん…真面目で、勤勉。掃除の仕事をしっかりやっている。
職業体験で、老人と関わる仕事の体験をしている。

(　C　)さん…(　子どもたちに勉強を教えること　)ができる！

※Ｃさん…勉強が得意で、そのことでクラスから一目置かれている。
数学などの教科で、Ｃさんに教えてもらう生徒もいる。

(　D　)さん…(　みんなを笑顔にすること　)ができる！

※Ｄさん…クラスのムードメーカー。

ワークシートの「自分ができること」には、荷物運びや、配膳、料理、案内表示を作る、子どもの世話などの答えが書かれていた。

・生徒の感想１

地震が起きた時に、避難所で暮らすとこのクラスの人とも顔を合わせるのかなと思った。その時に、協力できるように自分ができることを考えていきたい。

・生徒の感想２

他の人の役割を考えるのが難しかった。でも、普段接しない人について考えて、その人の良さを発見できた気がする。

6　成果と課題

●成果

◎防災の知識だけにとどまらず、他者について考える機会になった

普段の防災教育は、「知識」か「行動」に重きが置かれている趣があった。そんな中、クラスづくりに生かす防災教育の可能性を示唆する研究結果となった。それは、「他者を考えるきっかけになった」という生徒の感想からも見て取れる。

ところで、このような生徒同士がお互いを認めるような活動は、道徳をはじめとして行われているし、実際に私自身も行った。それは、例えば行事が終わるごとに「頑張っていた人」をピックアップして発表するような活動である。これは一定の効果が得られる面もあるが、いつも発表される人の名が同じであったり、生徒の中で慣れ親しんだ活動というイメージがよくも悪くもあったりとで、マンネリ化しているのも事実であった。

その中で、「地震が起きたときに、避難生活を送るとして」という視点があることによって、自然と他者について考えられるような切り口になっていたと思う。生徒も気構えることなく学習内容に取り組む様子が見られた。

◎普段考えていない視点で考えることができた

前述したとおり、どうしても道徳的に考えると一定の答えしか出てこない状況のなか、防災の視点があることによって、思いがけない答えを生徒から見ることができた。たとえば、防災教育の実践授業の第二次における「教室で地震がおきたときに、落ちてきそうなものを考える」の段において、生徒は改めて教室を見回し、普段は目につかないものにも着目できていた。さらに、そのことについて生徒が発表するときに、聞いている他の生徒も一緒になって教室にある備品を見ていた。結果、クラスにある種の連帯感が生まれた瞬間だった。協力やコミュニケーション、他者受容などについて、押しつけがましくなく考えるきっかけになった授業であったと思う。

●課題

・継続的な指導の必要性との兼ね合い

防災教育がもつクラスづくりへの可能性は、実践者として感じることができた。しかし、全３回の授業で生徒が大きく変容したとは言いがたく、また、行動の変容についても、その実践授業がどれだけの効果であったのか、一概に言えない部分があった。さまざまな活動が複合的に生徒たちの変容をもたらすものであるので、仕方のないことではあるが、もう少し活動を継続的に生かせるような取り組みの工夫が必要だったと思う。そのためには、避難訓練や、引き取り訓練、シェイクアウトなどの時に、生徒が自主的に動けるような役割を作ったりする活動が考えられる。

7　おわりに

印象的な出来事があった。震災の日の近くに、ある生徒が「黙とうをしよう」と呼びかけて、学級全体が１分間の黙とうを行ったのである。

今回の実践が、どれだけ生徒の心に届き、変容を促したのかは、不明確な部分もある。し

かし、３学期末には、不器用さは残りつつも、心根の優しさを表現できるクラスになっていった。特に、震災や命に係わるところでは、それが顕著に表れていた。

「命に関することだから、いざ震災に直面したら人々は助け合うに決まっている」という見方があるかもしれない。私も、少なからずそう思っている節があった。

ところが、日本は、防災に関して日頃から学んでいるからこそ、いざというときに手を取り合って行動できるのである。防災教育があまり行われていない国では、災害時に行動できず、いざというときにただ戸惑うだけで行動できないという話を文献で目にした[3)]。やはり、「継続は力なり」なのである。

この「継続」という点で、前述したとおり私は悔いが残っている。一つひとつの活動が点の状態であり、線へと結びつけることができなかった。ただし、中には統合的に考えられている生徒もいたように思う。指導者の意図によって、一つの学習で得られるものが変わるのを痛感したのも、今回の実践を通して学んだことの一つである。

また、昨年に行った実践を振り返る中で、「こうやっておけばよかった」と思うことがたくさんある。震災のエピソードから私たちが学ぶことが命の大切さだけでなく、もっとあるはずだ。震災からの復興の話を通して諦めないことの大切さを生徒は学べるだろうし、防災マップ作りを通して郷土を知ることにつながるはずだ。今回のテーマで言えば、「どうやれば上手にバケツリレーができるか？」というテーマで実践させれば、団結の大切さなどを学べるのではないか。外国人の立場で震災を考えれば、異文化理解や自分とは異なる価値観を知る手立てになる。まさに、防災教育は、ちょっとした工夫で学級づくりへの大きな可能性を秘めている。そのことに気付けたということでも、実践の意味があったと言えるだろう。そして、これは防災に限ったことではない。「教材」には、たくさんの可能性が詰まっている。常に研鑽を心掛け、多面的な見方をできる教員でありたい。

＜参考文献＞

１）文部科学省：学校防災の参考資料「生きる力」をはぐくむ防災教育の展開：2013 年
２）座間市ホームページ「神奈川県地震被害想定調査結果」
http://www.city.zama.kanagawa.jp/www/contents/1441244706300/index.html
３）諏訪清二『防災教育の不思議な力：子ども・学校・地域を変える』岩波書店